

報告

# 衣服のサイズに着目したデザインの可能性

## Design Possibilities Focusing on Garment Size

下川まつゑ

SHIMOKAWA Matsue

国際文化学部 文化創造学科 実習助手

### 要旨

筆者はこれまでに、サイズ調整の機能をデザインの一部として取り入れた服飾作品の創作活動をおこなってきた。それと同時に、衣装のオーダー制作や洋服、雑貨の商品開発、販売の実験をしてきた。本稿では、筆者が制作した2作品について取り上げ、ドロースtringの技法やスナップボタンを用いたサイズ調整の応用の可能性について考察する。また、ファッションデザイナーの作品や実際の衣料品サイズ、貸衣装のサイズ調整機能から見出される、身体と衣服の関係を踏まえて、衣服のサイズ調整機能によるデザインの可能性について模索する。

### Abstract

The author has been involved in the creation of clothing that incorporates the function of size adjustment as part of its design. At the same time, she has experimented with custom-made costumes and product development and sales of clothing and sundry goods. This paper discusses two of the author's creations, and examines the possibility of applying drawstring techniques and snap buttons for size adjustment. In addition, based on the relationship between the body and clothing found in the works of fashion designers, actual clothing sizes, and the size adjustment function of rental garments, the possibility of design using the size adjustment function of clothing is explored.

### 1. はじめに

筆者は2019年、試着体験のためのバスルドレスのプロジェクト<sup>1</sup>において、ドレス制作の一部を担った。このドレスは試着体験によって、当時のパリの服飾文化を疑似体験してもらうことを目的に制作したものである。ドレスは特に身体のフィット性が重要であるため、不特定多数の人の体型に合わせて着装できるように、上衣やスカートのウエストにサイズを調整する機能を取り入れて制作した。衣服自体のサイズが変化することで、着る人の幅を広げることができる実感し、着る人にサイズを合わせる衣服の可能性について興味を持った。

筆者はこれまでに、サイズ調整の機能をデザインの一部として取り入れた服飾作品の創作活動をおこ

なってきた。それと同時に、衣装のオーダー制作や洋服、雑貨の商品開発、販売の実験をしてきた。

本稿では筆者が制作した作品をもとに、デザインの着想源や縫製技法、現代のデザイナーの表現、衣服に用いられるサイズ、ドレスのサイズ調整の工夫について考察し、サイズ調整するデザインの可能性を模索していくことを目的としている。

### 2. 制作作品

衣服のサイズを調整する機能に着目し、サイズを変化することによって生まれる造形を衣服のデザインとして取り入れて作品を制作した。ここでは2作品を取り上げる。日常着としてではなく、アートの発想から創作した作品である。作品について解説

1 松尾量子ほか「『寺内正毅に関する総合的研究』報告書」、「寺内正毅に関する総合的研究」成果報告書編集委員会（山口県立大学）、2020年、6-9頁。

しながら、作品のディテールや発想を応用する新たな可能性を見出したい。

### (1) ドロースtringを用いた衣服デザイン

作品のタイトルは「Adjustable Fashion<sup>2</sup>」(図1)である。Adjustableとは調整できるさまを表した言葉である。古代ギリシャ、古代ローマで着用されていた衣服を着想源に、簡単に身体に合わせてサイズを変えられる服へとデザインした。この作品はワンピースと外衣のマントの2つのアイテムで構成されている。これらのアイテムには、部分的に紐通しをつけ、紐を引くことによってサイズを調整する、



図1

ドロースtringと呼ばれる技法を取り入れた。紐を引くことで生まれるギャザーやドレープの造形を活かすため、柔らかく皺になりにくい素材を選び、ワンピースはポリエステルポプリン、マントはポリエステルトロワッシャーを用いた。マントの裏地には古着の着物地を使用し、和のイメージを加えた。

デザインの着想源となった古代ギリシアや古代ローマの衣服は、懸衣<sup>3</sup>と呼ばれ、1枚の布や皮をそのまま身体に巻きつけたり、肩から垂らしたりして着用する衣服形式のことを指す<sup>4</sup>。当時、織物の布は貴重品であったことから、裁断されることなく大きな一枚の布を着装していた。古代ギリシアの代表的な衣服としてキトンやペプロスが挙げられる。大きな布を身体の側面から前後を覆い、両肩をフィビュラと呼ばれる留金具を使用して着用した。薄手の麻などで生地が作られるようになると、繊細なドレープを作り出すことができ、美しい布の表現が生まれた。キトンやペプロスの上からは、外衣としてヒマティオンと呼ばれる衣服が男女ともに着用された。ヒマティオンは厚手のウールでできた約2m×3-5mの長方形の布を、肩にかけて全身を覆ったり、女性はショールのように巻きつけたり、さまざまな着方をしてきた。

今回はキトンやペプロスのシルエットをワンピース形にアレンジし、ヒマティオンをマントに見立ててデザインしている。単に衣服を身体のサイズに合わせて着装するだけでなく、古代ギリシアの服飾に特徴的なギャザーやドレープの美しさを、ドロースtringによって再現し、纏うことができる衣服を目指した。

ワンピースとマントの構造は図2、図3の通りである。全体的に直線断ちを意識して構成した。ワンピースはノーカラー、ノースリーブで、ウエストにはタックを入れた。青矢印で示したウエスト部分とスカート脇に紐を通し、紐を引っ張ることで長さを縮めて、身幅と丈の長さを調整できるようにした。マントは前身頃の丈を短くし、後身頃と合体した裏地の着物地が前から見えるように設計した。襟ぐり、右脇、ウエスト、左袖に紐を通し、全身にフィットさせて着用する。ドロースtringは、ゴムで縫い縮めるシャーリングとも似ているが、縮める分量を紐で調整でき、身体に合わせて好みでアレンジする

2 2021年度 国際服飾学会議 第40回大会においてInternational Costume Exhibitionで発表した作品。

3 谷田関次、石山彰『お茶の水女子大学 家政学講座 服飾美学・服飾意匠学』光生館、1969年、29頁。

4 富田明美『生活科学テキストシリーズ新版アパレル構成学 着やすさと美しさを求めて』朝倉書店、2012年、6頁。

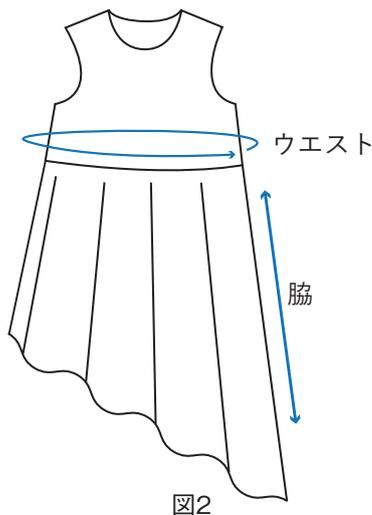


図2

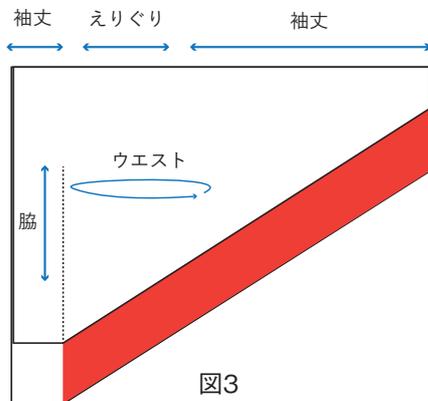


図3

ことが可能である。

実際に着用すると、その場でモデルの身体に合わせて紐を締めることでサイズ調整が簡単に行える。しかし、服のシルエットやデザイン自体は基本的に同じである。また、多少のサイズ調整が効くとはいえ、極端に体型が違いすぎると、衣服のバランスを保ったままでの調整は難しい。ドロースtringの技法を応用していくとすれば、一部分に取り入れ、それが機能的でかつ美的な効果を発揮するデザインにしていく必要があるといえる。

筆者は「Adjustable Fashion」の作品制作を経て、ドロースtringの技法を実際の日常着に応用し、商品として展開する実験を行った。夏用のワンピース(図4)としてデザインし、実験的に販売も試みた。身幅を広くとり、そのまま着用すると、ゆったりとしたシルエットになり、ウエストに取り入れたドロースtringの紐を締めるとウエストフィット



図4

して、シルエットに変化を出すことができる。リネン素材を用いた涼しげなワンピースにデザインした。

多数の作家の作品を取り扱うテナントで委託販売として実験的に販売した。一見シンプルで着やすいように思っていたが、結果的には、それがかえって面白みに欠けてしまっていた。他に並ぶ商品には、作家の個性が強く表現されているものも多く、その中に並ぶと印象に残らないものになっていた。商品開発の視点から言うと、単に技法を取り入れるだけでなく、デザインに新鮮さも必要であるし、同時に着用するシチュエーションやターゲットとなる顧客、商品のストーリーを模索していくことが必要であるといえる。

## (2) スナップボタンを用いた衣服デザイン

作品のタイトルは「Button dress<sup>5)</sup>」(図5)である。衣服全体にリングスナップボタンが取り付けられたワンピースである。定期的にスナップボタンを留めていくと、ウエストにサイズフィットさせたり、丈の長さ

5 2022年度 第29回 国際服飾学術会議においてInternational Costume Exhibitionで発表した作品。AWARD OF EXCELLENCE受賞。

を変えたりできる。それと同時に、立体的な造形が生み出される。前作品よりも、着用者自らが服の造形を柔軟に変えられるデザインに発展させた。

身長に応じて以下のようにスタイルを変化させることができる(図6)。スナップボタンの留め方次第で、プリーツやスモッキング、ドレープのような造形がつくり出される。使用した素材は、スナップボタンの留外しに耐えうる丈夫なポリエステルウェザークロスである。

ワンピースの構造は図7の通りである。ワンピース全体には、約250組のリングスナップボタンを取り付けた。スナップボタンを生地の裏表から挟みこむことで固定している。ウエストからスカートにかけて5cm間隔や10cm間隔に規則的に取り付け、ボタン同士を留め合わせていくことでサイズ調整を可能にした。袖は衿と一体型になっており、袖のスナップボタンを全て外すとノースリーブとして着用することもできる。肩にもスナップボタンを付け、タックのように布を畳むことで肩幅を調整できる。スカートは2枚構造となっている。これは、座る際に後スカートのスナップボタンを踏んでしまうことを避けるためである。外側のスカートをめくることで、踏まずに座ることができるようにした。外側のスカートは長方形にすることで、着装した時にスカート丈の長さに変化が出る効果をねらっている。



図5



図6

スナップボタンによるアイデアはスモッキング刺繍から発想している。スモッキング刺繍はイギリス発祥の刺繍技法である。布に細かくひだを寄せて、そのひだ山を針ですくって縫い縮めることで模様を作り出す手法である。もともとは、直線断ちの衣服を身体に合わせるための工夫でもあった。スモッキングを解くと一枚の布に戻ることから、糸で縫い留める箇所をスナップボタンで代用できるのではないかと実験した。規則的に留めればスモッキングのように立体的にもできるし、外せば平面に戻る。留める位置を変えれば、ドレープを出したり、プリーツにしたり、表現豊かなワンピースになる。

実際に着用してみると、数多くのボタンを留める作業に時間はかかるが、ウエストを中心に、よりフィット性を持たせることができた。細かなサイズ調整も可能である。

この作品を展示発表した第29回国際服飾学会議においては、スナップボタンの一部を子供服に応用してはどうかとの意見があった。ボタンの留め外しは手指のトレーニングにもなり、何より楽しみながら着用できるのではないかというものであった。デザイン性や機能的という視点だけでなく、着ることそのものを楽しむという、感情にコミットした服になりうるという新たな発見があった。

まだスナップボタンを応用した制作の実験までは至っていないが、ボタンの留め外しによる表現の応用の可能性も十分考えられる。

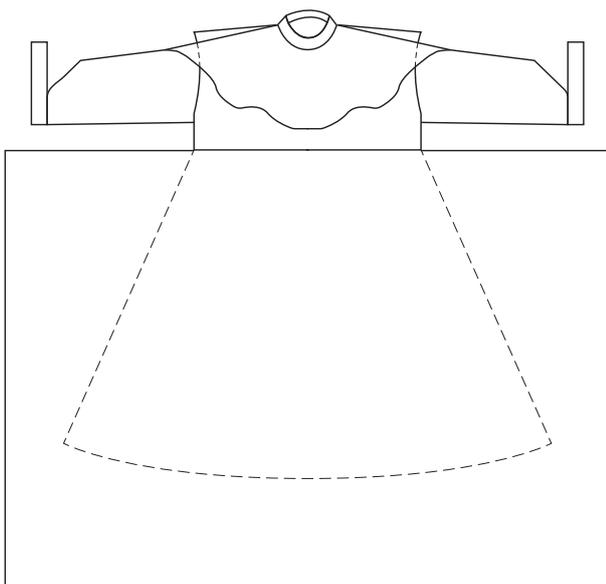


図7

### 3. ファッションデザイナーの表現

筆者は衣服を身体のサイズに合わせることで生まれる造形をデザインの要素として捉え、作品制作を行ってきた。ここでは、自身の作品と関連して参考となるデザイナーの作品からISSEY MIYAKE（イッセイミヤケ）と、制作において参考としたANREALAGE（アンリアルエイジ）の2つのブランドを取り上げ、デザイナーの作品に見られる衣服のサイズの捉え方や造形について考察し、表現の可能性を見出したい。

#### (1) ISSEY MIYAKE

デザイナーの三宅一生が1970年に「三宅デザイン事務所」を設立した翌年、「ISSEY MIYAKE」のブランドが立ち上げられた。創業当初から現在に至るまで「一枚の布」という考え方のもと、1本の糸からオリジナルで素材を開発しながら、身体とそれをおおう布、その間に生まれるゆとりや間の関係を根源から追求する服づくりをおこなっている<sup>6</sup>。

ISSEY MIYAKEを代表するプロダクトといえばプリーツ（図8）である。1988年に初めて発表されて以降、ブランド「PLEATS PLEASE ISSEY MIYAKE」として現在まで愛され続けている。このプリーツは、軽く、しわになりにくく、復元力に優れ、体を締め付けない。洗濯できて早く乾き、収納しやすい。さらにシルエットや動きが美しく、機能性と美しさを兼ね備えた衣服である<sup>7</sup>。プリーツは完成品の2.5倍程度のサイズでパターンが作られ、裁断、縫製された服にプリーツ加工が施される<sup>8</sup>。布にプリーツを寄せて身体に心地よくフィットさせる過程は、布にひだを寄せて身体にフィットさせてきた古代の服とも通じる。適度なゆとりを持ちつつ、自在に伸縮し、身体に寄り添うプリーツは、身体が服のサイズから解放されたような表現にも思える。身体のサイズにぴったり合うことが、必ずしも心地よくフィットするとは限らないのかもしれない。身体と布の間を意識することが心地よい服へのアプローチになりうると思う。

1990/1991春夏に発表された「コロンプ」（図9）という作品は、フランス語で平和の象徴である「白い鳩」を意味する。この服はモノフィラメント素材のポリエステル生地を使用し、ハサミを使わ

6 FASHION PRESS 「ISSEY MIYAKE」 <https://www.fashion-press.net/brands/6> (2022/12/27取得)

7 「PLEATS PLEASE ISSEY MIYAKE20年を超えて広がり続ける無限のプリーツ」『日経デザイン』日経BP社、2017年6月号、42頁。

8 生駒芳子「服作りの変遷と思想でたどる三宅一生の軌跡」『美術手帖』美術出版社、2011年12月号、65頁。



図8

ずに熱で裁断されている。針や糸の代わりに、布に取り付けられたスナップボタンを留めることによって造形され、体にフィットさせている。まさに「一枚の布」から生み出されるドレスである<sup>9</sup>。スナップボタンによる造形は筆者の作品と同様の手法であるが、素材による表現の違いが出るのは興味深い点である。

## (2) ANREALAGE

デザイナーの森永邦彦が2003年に設立したブランドである。ブランド名のANREALAGEとは、A REAL-日常、UN REAL-非日常、AGE-時代、を意味している。日常の中にある、非現実的な日常、また、ふとした振れに眼を向け、見逃してしまいそう



図9

な小さなことをデザインの着想としている<sup>10</sup>。

2009年春夏コレクションでは「○△□（まるさんかくしかく）」というタイトルで、球体、三角錐、立方体を原型とする服を発表した（図10・11）。身体に沿わせることを前提としてきた服を、身体から引き剥がし、全く異形の造形にすることで、原型自体の問い直しを行った<sup>11</sup>。森永は、「球体や立方体の体を持った人間なんていない。誰にも合わないということは、つまり誰でも着られる服だということ<sup>12</sup>」と述べている。服作りにおいて、身体のサイズを基準に作るものが常識とされてきた。その中で、体に合わない服という形が、実はサイズや性別を超える服になりうるのだと体現したコレクションである。

9 三宅一生、青木保（監修）『MIYAKE ISSEY展：三宅一生の仕事』求龍堂、2016年、12頁、236頁。

10 FASHION PRESS「ANREALAGE」<https://www.fashion-press.net/brands/325>（2022/12/24取得）

11 ANREALAGE OFFICIAL COLLECTION [https://www.anrealage.com/collection/100001/collection\\_2009\\_ss](https://www.anrealage.com/collection/100001/collection_2009_ss)（2022/12/24取得）

12 織研新聞社「アンリアルエイジ」を日常に定着させる「アンシーズン」[https://senken.co.jp/posts/anseason\\_anrealage1](https://senken.co.jp/posts/anseason_anrealage1)（2022/12/24取得）



図10



図11

2014年春夏コレクションでは「Size」をテーマとした服を発表した。ショーの前半では同じアイテムの縮尺を変えたデザインを用いてコーディネートに変化をつけた。またアウターやインナーのサイズが異なることを逆手にとって、アウターとインナーを逆転したようなデザインを発表した。さらにショーの後半ではサイズを持たない服として、大きさやフィットの調整を可能にしたダイヤル式の調節機能を取り入れた服を発表した。ショーの中では、体型の異なる3人のモデルが同じワンピースを着用し、登場した(図12・13)。このワンピースはダイヤルを回すことによって、服の内部に張り巡らされた糸が伸縮し、着丈や身幅、袖丈を調整する構造になっている。シャーリングのように布が縮むことによってギャザーやドレープが生まれ、身長やサイズの異なるスタイリングになる。「人と服の距離を縮めたい」という森永の思いから、「着る人に委ねる服」を目指したコレクションである。

ANREALAGEは当たり前を問い直し、既成概念を壊すことで、新しい価値観を生み出す。これらのコレクションでも、服作りの前提ともなっているサイズの概念を捉え直すことで、新しいデザインを生み出した。思想がデザインに反映されているだけでなく、衣服としても成り立っていることで、より強いメッセージ性を発している。デザイナー側の一方的なス

タイトルの提案ではなく、着用者にその着方が委ねられる点においては、人に寄り添った服だと言える。



図12



図13

#### 4. 衣料品におけるサイズと現状

前章までは衣服のサイズを、デザイン要素として、また、概念的な表現として捉えてきた。ここでは、私たちが実際に身につける衣服がどのようなサイズで用いられているのか明らかにし、着用者におけるサイズの課題を考察したい。

国内の衣料品におけるサイズ表記は、経済産業省が制定する日本工業規格 (JIS) が指標となっている。JIS規格とは製品の種類や寸法、品質、性能、安全性などを定めた国家規格である。日本では1960~70年にかけて、既製服の生産が増加したことに伴い、1980年にISO (国際標準化機構) 規格を参考として、JIS規格が制定された。時代による体格の変化を考慮しながら、体格調査が行われ、約4年ごとにサイズが改定されている<sup>13</sup>。

13 富田明美『生活科学テキストシリーズ新版アパレル構成学やすさと美しさを求めて』朝倉書店、2012年、106-110頁。

呼び方		3AR	5AR	7AR	9AR	11AR	13AR	15AR	17AR	19AR	3AT	5AT	7AT	9AT	11AT	13AT	15AT	17AT	19AT			
基本	バスト	74	77	80	83	86	89	92	96	100	74	77	80	83	86	89	92	96	100			
	ヒップ	85	87	89	91	93	95	97	99	101	87	89	91	93	95	97	99	101	103			
身 長		158									166											
参考	ウエスト	年代区分	10	58	61	61	64	67	70	73	76	80	61	61	64	64	67	70	73	76	80	
			20			64																
			30	61	64	64	67	70	73	76	80	84				67	70	73		76	80	
			40			67																
			50	64		67	70	73	76	80	84						73					
			60			70	73	76	80	84	88					70						
			70				76	80	84													

図14

下着ブランドのワコールでは毎年1千人近くの女性の人体計測をおこなっており、独自の測定データを持っている<sup>14</sup>。このデータは他のアパレルブランドも参考にして衣服のサイズに反映されている。アパレルにおいてもサイズは非常に敏感なものである。

衣料品のサイズはヌード寸法で表記される。衣服の仕上がり寸法だと、使用する素材やデザインによって寸法が変わってしまうため、体型の実寸を用いることで誤差を少なくできるからである。JIS規格では、乳幼児用、少年用・少女用、成人男性用、成人女性用、ファンデーションに分類されている。図14は成人女性のサイズ分類を示した一部である。フィット性が求められる衣服においては、身長、バスト、ウエスト、ヒップの組み合わせで表示される体型区分表示が用いられる。

サイズとして細かく分類はされているが、身体にフィットするサイズは、流行やブランド、服のデザインやシルエットによって変わる曖昧なものである。

例えば、中高年向けのブランドであれば、11号サイズを9号サイズと表記するなど、ブランド独自のサイズ表記が見られる。また、フリーサイズ (F) と記載しているものもある。フリーサイズは、体型を選ばず、誰もが着られる衣服と捉えられがちだが、実際は、サイズ展開されていない、ワンサイズしか作られていないという表示でもある。フリーサイズはそのブランドの顧客の平均的な体型を参考に作られるため、誰でも着られるという捉え方は正確ではない。

サイズ分類は、自分の体型がどこに当てはまるのかを知る目安になるが、標準以外の体型や姿勢の変化のある高齢者の適合率はまだ低いという。近年、

多様なニーズに合わせて、大きいサイズや小さいサイズを専門に扱うブランドも増えてきているが、デザインに限られることもありうる。

サイズ調整の技法をうまく融合していくことで、サイズフィットする有効な手段が得られる可能性もある。今後、サイズに関わるデザインを進める中で、細かなニーズに目を向けていくことも必要だといえる。

## 5. 貸衣装ドレスにおけるサイズの工夫

身体のサイズに合わせて着装する工夫は実際にどのような方法が用いられているか、貸衣装のドレスを例に取り上げ、サイズ調整技法の参考にしたい。

今回、株式会社エーミール 代表取締役会長、西脇末美会長のご協力を得て、所有するドレス衣装の縫製について調査を行った。

貸衣装ではさまざまな体型の人に合わせて着用する必要がある。特にビスチェタイプのドレスでは上半身のフィット性が重要である。そのため、上半身部分は3重構造になっており、上半身内側には、バスト下からウエストにかけてカバーする、幅のあるゴムが仕込まれている (図15)。このゴムを体に合わせて、背中でスナップボタンやホックを留め合わせることでフィットさせる。その上からスカート部分と繋がるファスナーを締め、一番外側の装飾のある上半身は紐をホックに引っ掛けて、体のサイズに合わせて締めていく (図16)。適合するサイズの範囲は、バスト寸法でいうと最大6 cmの調整が可能になっていた。メーカーによっては、上半身の脇にゴムシャーリングが施され、カバーできるサイズを増やす工夫も見られた。

14 ワコール人間科学研究開発センター <https://www.wacoal.jp/hsrc/index.html> (2023/1/7取得)

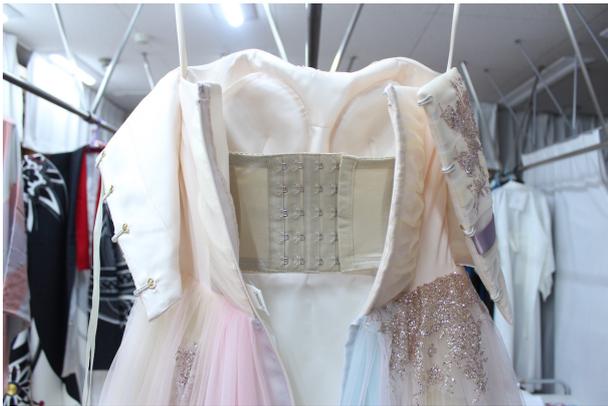


図15

そのほか、貸衣装のドレスで特徴的なことは、限られた時間の中で着替えを行う必要が出てくることである。身体にサイズを合わせる機能性以外にも、着脱しやすい構造であることが重要である。また、そこには副資材として用いられるホックやファスナー、アジャスターなどの使用位置や品質も関わっている。

貸衣装ではサイズを合わせる機能を持ちながらも、デザインを保ったまま着用されている。



図16

## 6. おわりに

本稿では、サイズ調整するデザインの可能性について考察した。

制作した作品では、用いた縫製技法やディテールを取り入れた商品開発としての可能性や、子供服への応用が考えられる。

デザイナーの作品からは、身体とサイズの心地よい間を作ることや、サイズという概念をなくした服づくりによる新しい視点が見出された。

衣服で用いられているサイズを検証すると、衣服サイズの曖昧さがあることがわかる。また体型変化のある高齢者のサイズの適合率は低く、サイズ調整技法を融合していくことで有効に応用できる可能性もある。

ドレスのサイズ調整機能では、適合サイズの幅がありながらも、ゴムやホック、ボタンなどでしっかり身体にフィットさせる構造が用いられていた。また着用シーンを意識した機能性が見られた。サイズを変化させてもデザインやシルエットには影響のないような作りになっており、衣装ならではの特性があることがわかった。

衣服のサイズは、着用者にとって重要な要素である。サイズから発想した服づくりを行うことで、着用者に寄り添った衣服になりうると思う。衣生活を豊かにできる一助となるよう、今後も創作を続けていきたい。

## 画像出典

図8 三宅一生、青木保（監修）『MIYAKE ISSEY展：三宅一生の仕事』求龍堂、2016年、89頁。

図9 前掲書、69頁。

図10・11 ANREALAGE 2009 S/S COLLECTION “○△□”

[https://www.anrealage.com/collection/100001/collection\\_2009\\_ss](https://www.anrealage.com/collection/100001/collection_2009_ss)

図12・13 ANREALAGE 2014 S/S COLLECTION “SIZE”

[https://www.anrealage.com/collection/100001/collection\\_2009\\_ss](https://www.anrealage.com/collection/100001/collection_2009_ss)

図14 富田明美『生活科学テキストシリーズ新版ア パレル構成学着やすさと美しさを求めて』朝倉書店、2012年、111頁。